

教育長賞

堺市立 美原中学校 三年

岡本 沙采

一つの行動で

法に触れたことや、犯罪を犯したことはあるだろうか、と聞かれると、きっと大半の人は「ノー」と答えるだろう。なぜなら、それは幼い頃から「いけないことだ」と教えられ、いわば、常識と呼ばれるものだからだ。ならば、その常識から「外れてしまった人」はどうなるのか。私自身、今まで深く考えたことはなかった。だが、この作文を書くにあたり、考えてみると思うことが幾つかあった。

テレビやSNSを見ると、いろんなニュースが日々伝えられている。その中で私は有名人が犯した犯罪を伝えるニュースが目が留まった。犯罪を犯してしまうことはよくないが、その後の社会復帰の難しさは想像以上のようなのだ。大々的に報道され、その人が出演する作品などは撮り直し、公開中止をせざるを得なくなるなどしている。特に大きな罪ともなると、表舞台に立てなくなる人もいる。もし復帰できたとしても、以前のような活躍ができるのは、かなり厳しい状態であると言わざるを得ない。周りからは心ない言葉が投げかけられる。こういったことも、仕事や社会

への戻り辛さの一因になっているのではないかと思われる。

犯罪のほとんどは、悪意を持った人間が起こすものだという認識がある。だが、もしかしたらそこには、その当事者の計り知れない苦しい思い、葛藤などがあったのかもしれない。追い詰められていたり、溜まりに溜まったものがあつたのかもしれない。そう考えると、私たちは犯罪をしてしまった人に、少しでもいいから寄りそうことが大切なのではないかという思いになる。

そのようなことを考える中、ある言葉に出会った。

『平生はみんな善人なんです、少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。』

これは、夏目漱石が著した『こころ』という本の中の言葉だ。

この言葉を見たとき、悪人も元は普通の人間なのだ、という、ごく当たり前のことに気づいた。ゆえに、無論犯罪を許していいわけではないが、誰でも犯罪者になりうる可能性があるからこそ、罪を犯してしまったことで、根本から全て否定してはいけないと

思う。そして、その人がよりよい方向に向かって生きていくには、世間の認識を変えることも必要だと思う。そのためには、犯罪を犯してしまった人の立ち直りを、テレビなどで放送し、知ってもらい、そこから私たちはどうやって犯罪者たちと向き合っていくのかを考えることが大切だと思う。「罪を犯した」という過去を変えることはできない。だが、未来は変えることができる。

私たちは、たった一つの行動でも犯罪者になってしまう。だからこそ、偏見の目を向けるようなことはせず、助け合うことが大切だと、私はそう思う。その行動一つで社会はきっと明るくなるはずだから。

